

ラジオドキュメンタリー番組制作における 制作者の変容プロセス Transformation process of the producer in the radio documentary program production

◎佐野 有利¹
Aritoshi SANO

¹法政大学大学院政策創造研究科政策創造専攻
Hosei Graduate School of Regional Policy Design

要旨…県域民間ラジオ局のラジオドキュメンタリー番組は、制作者1人で多くの制作作業を行っていることから番組制作に関する多くの能力を獲得していると考えられる。本研究では制作者の半構造化インタビューからドキュメンタリー制作による経験と能力の内容、能力の転用について示す。

キーワード ラジオ 番組制作者 経験学習 ドキュメンタリー M-GTA

1. 問題と目的

本研究ではラジオドキュメンタリー制作者の経験と能力、その転用を明らかにすることを目的とする。

ラジオ放送は聴取率が低下している(1)ものの、近年自然災害発生時には変わらず注目される存在である。ラジオ局としては非常時に限らず、平時から地域性と信頼性のある情報を提供できるように今後も取り組む必要がある。

我々が情報を入手する手段にはラジオ以外にテレビやインターネット等がある。しかしそれぞれに表現方法と情報内容に対する限界がある。テレビ放送は映像が必須で人権やプライバシー、肖像権への配慮が必要であり全ては表現できない。インターネットには SNS を中心に不確かな情報が多い。一方ラジオは音声のみだが、だからこそ隠された社会も取材可能であり、そこに存在する事実を明らかにできるという特性を有したメディアであり、その調査に基づいた信頼性のある報道も可能である。ラジオ番組制作者(以下「制作者」とする)に求められるのは、ラジオというメディアの特性を理解したうえで、取材によって得られた情報を批判的思考に基づいて整理分析し、情報を発信し表現する能力である。その際には取材対象者や共同制作者とのコミュニケーション能力も欠かせない(2)。これらの能力を備えて初めて、制作者は番組を通じてリスナーとの信頼性のあるコミュニケーションが可能となるからである(2)。また県域局では地域の各主体を結ぶコミュニケーターとなり、地域性を番組に反映できる能力も必要である(3)。しかし、これらの番組制作の主体となる制作者の必要欠くべからざる能力やそれを獲得する過程、およびその過程を経た結果の制作者の変容については、これまであまり明らかにされてこなかった。その理由として、制作者への評価はその成果物である番組そのものの評判に左右されることが多いことに加え、その番組内容も制作者個人のセンスに依存するものと考えられ、能力として獲得可能か否かという視点に欠けていたことが挙げられる(4)。この能力獲得という観点から特に注目されるべきはラジオドキュメンタリー制作者である。ラジオドキュメンタリーは多くの制作者との共同作業である生放送とは違いほぼ1人で制作されており(5)、番組制作に関する多くの能力を獲得する機会があるため、能力獲得と変容のプロセスを明確に把握しやすいからである。現在のラジオ局は高齢化が進んで豊富な経験を持つ社員が減り、制作能力の伝承者が減っている(6)。一方能力を継承していく側の制作者は継続的な雇用と教育がされない非正規労働者が多いという指摘もある(7)。番組制作は制作者独自の創造的表現方法に支えられ、制作者個々の文脈に依存する暗黙知の部分が多く、マニュアルも存在しないため伝承しにくい。放送局の制作現場の管理者は制作経験者が少なく(7)、制作者に必要な能力を理解できず、作業時間が短く質の高い番組を作る制作者に業務が集中するとされる(8)。これらの事情も本研究ではラジオドキュメンタリー制作者に注目する理由となる。制作者は制作経験により多くの能力を獲得し、獲得した能力が他の番組へ転用されキャリアにも影響を与える可能性もある。つまりメディア全体における番組制作能力を有した人材育成に関する示唆が得られる可能性が高いので、ラジオ番組の制作者がドキュメンタリー制作を通じて獲得する能力について明らかにする必要がある。

ラジオ制作者の能力形成に関する先行研究では、知識や情報を効率よく活用しているとされている(9)。また地域と関わりから制作者のアイデンティティが形成される(10)。ドキュメンタリー制作では、大学生が制作すると作品に対する評価より社会との関係や価値観が変化し(11)、社会にメッセージを発信する視点で考える(12)。放送局員は個人のセンスが必要であり(13)、人間の葛藤と現実社会の矛盾と普遍化される社会性に対して問い続ける重要性を指摘している(14)。以上から制作者に必要な能力として「社会問題を捉える能力」「取材対象者との人間関係づくり」「情報収集と分析力」、ドキュメンタリーに限れば「社会を掘り下げ音で表現する能力」「人間と現代社会の問題に対する関心と表現する能力」を挙げている。しかしドキュメンタリー制作の能力と転用については先行研究でも明らかにされていない。

ドキュメンタリー制作過程は学習の場でもあり、取材対象者や他の制作者とのかかわりを含んだ経験をする。その経験を学習のリソースとして獲得する知識やスキルを学習の結果や成果と捉える。なおあくまで個人の学習に限定する。

仕事上の学習モデルには学習転移モデル、批判的学習モデル、正統的周辺参加モデル、経験学習モデルの4種類がある(15)。本研究が目する学習モデルは経験学習モデルである。注目する理由は他の学習モデルとは違い、経験学習モデルではラジオドキュメンタリー制作と同様にマニュアルが存在しない、暗黙的な知識・スキルの修得を目的とするからである。そして伝承者の存在は不要であり、自らの具体的な経験によって知識を獲得できる。つまり、経験学習モデルとは知識を積極的に覚え、自らの経験からマイセオリーを紡ぎ出すというモデルであり(16)、実際に経験して学ぶことである(17)。経験学習では①具体的な経験②内省的検討③抽象的理解④積極的行動を順番に循環する。この循環により能力が形成、刷新されていく。さらに学習機会についても注目する。ラジオ局では局外の人間が行き交っている。制作者は取材などでも社外の人間との接触も多く、新たな繋がりを模索している可能性がある。組織の変化やニーズに応えるには、固定されたチームや組織や専門性の境界を越え、人間同士の新たな繋がりが必要である(18)。越境とは境界線などを越えることである(19)。本研究では越境して行われる学習を越境的学習とし、組織との関わりを有する働く人、働く意思のある人が自ら準拠している状況の境を越え状況外との間を往還するという認識がある学習と定義する(20)。学ぶ場所、共同体を実践共同体とし、所属メンバーが興味・関心を共有し相互に貢献し活動する(21)。

本研究では経験と能力の内容、能力の転用について明らかにするため次のリサーチクエスション(RQ)を設定する。

RQ1 制作者はドキュメンタリー制作のどのような経験を通して、どのような能力を獲得しているのか。

RQ2 RQ1で獲得した能力をラジオドキュメンタリー以外の番組に転用できるか。

2. 方法

本研究では RQ を解明するために、県域ラジオ局所属の常勤社員でドキュメンタリーを複数回制作していること、さらに制作能力の習熟度が一定の水準に達していることを示すために、番組コンクールでの受賞経験がある者を中心に調査対象者を選定した。経営が逼迫するラジオ局において、ドキュメンタリーを常勤社員以外が長期間繰り返し制作する可能性は、業務委託費用の面から可能性が低いと考えられる。また複数回制作していることで変容の結果が見られると想定される。さらに以下の2点の理由から、ドキュメンタリー制作者が調査対象者として妥当であると判断した。

理由1：ラジオドキュメンタリー制作では多くを1人で行うため、経験から獲得した知識や能力の内容がはっきりするため。

理由2：長期間1人で制作することで、当事者意識から能力を身につけやすく、他の番組への転用も観察しやすいと考えたため。

調査対象者として県域民間ラジオ局4社から常勤社員10名を選定した。毎年全国でのドキュメンタリー制作数が100本程度であり10名という調査人数は希少性が高い。また60代2名、50代1名、40代4名、30代3名と年齢と地域が極端に偏らないよう配慮した。さらに他の業務経験と能力との関連を観察するために全員にラジオ制作以外の業務経験がある者を選定した。インタビューは2017年8月から2018年1月にかけて4社10名に調査対象者が指定した場所で半構造化面接を実施した。1名あたりの実施時間は1時間から2時間であった。調査対象者の選定はスノーボールサンプリングで行った。その際には複数回のドキュメンタリー制作経験、日常の番組制作経験、意欲の向上に繋がる具体的な経験が事前に確認できることとした。

分析方法はインタビューを文字として記録し、その逐語録を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(22)(以下 M-GTA)に基づき分析した。分析テーマは「分析焦点者はどのようにドキュメンタリー制作に臨み、どのような経験をして変容していくのか」、分析焦点者は「県域民間ラジオ局においてドキュメンタリーを制作し、経験を生かそうと考えている人」である。本分析においては概念化された結果を、社会人経験30年以上で、番組コンクールでの受賞歴と制作者への指導歴があるラジオドキュメンタリー制作経験者2名の協力により検証と検討を行って、恣意的な解釈とならないよう留意した。

する。変容中期では、映像や文字メディアとは違う特徴を発見して、想像を掻き立てる表現を探索する。

次に、番組テーマへの追求、徹底的な取材能力である。変容初期では、取材の準備を念入りに行う。変容中期では取材交渉の難しさから交渉能力を向上させる。取材中では想定外の驚きと発見があり、本音を引き出そうとする。変容後期では、取材対象者との距離の難しさに苦しむが、根気よく取材することで本音や印象に残る言葉を得ることもできる。

最後に、表現方法へのこだわり、リスナーに伝わる番組表現能力についてである。変容前期では、音と言葉で表現する難しさを感じつつ、リスナーに内容が伝わる番組表現と、的確で表現豊かなナレーション原稿を作成しようとする。変容中期では取材対象者からの感想で制作者の内省を促す。しかしラジオ番組を長時間聞くという習慣がリスナーにない。そこで番組構成を工夫しテンポを考える。変容後期ではナレーターを選び、語りかけ方を考える。その際に制作意図がぶれないことが大切である。そして最終的には感覚で取材や番組内容が見通せるようになる番組全体の俯瞰能力を獲得する。

制作後は意欲の向上や変化が起きる。まず周囲とのかかわりである。家族や職場へ感謝している。職場では得られた能力を活用しようとし、周囲からのアドバイスで制作意欲も喚起される。しかし制作過程が理解されていないとも感じている。次に後悔と反省である。時間がたつと達成感もあるが不満も残る。制作期間が限られ日常の番組制作業務の中で時間が確保できなかったと感じる。一方で番組にはリスナーの反応もあまりなく、疑問も感じる。3点目は社外評価である。番組コンクールの結果の自信や悔しさから、渴望が生まれる。

そして、様々な仕事に対する意欲の変容が現れる。他の番組への経験活用や日常の番組でのアナウンサーへの的確な指示にも活用される。そして番組でとりあげる内容を日常習慣的に探求するようになる。さらに自局外で制作方法を学ぼうとする欲望も生まれる。その結果、それは自分の関心に基づき成長願望となる。なお、意識の中心にはリスナーへの意識がある。

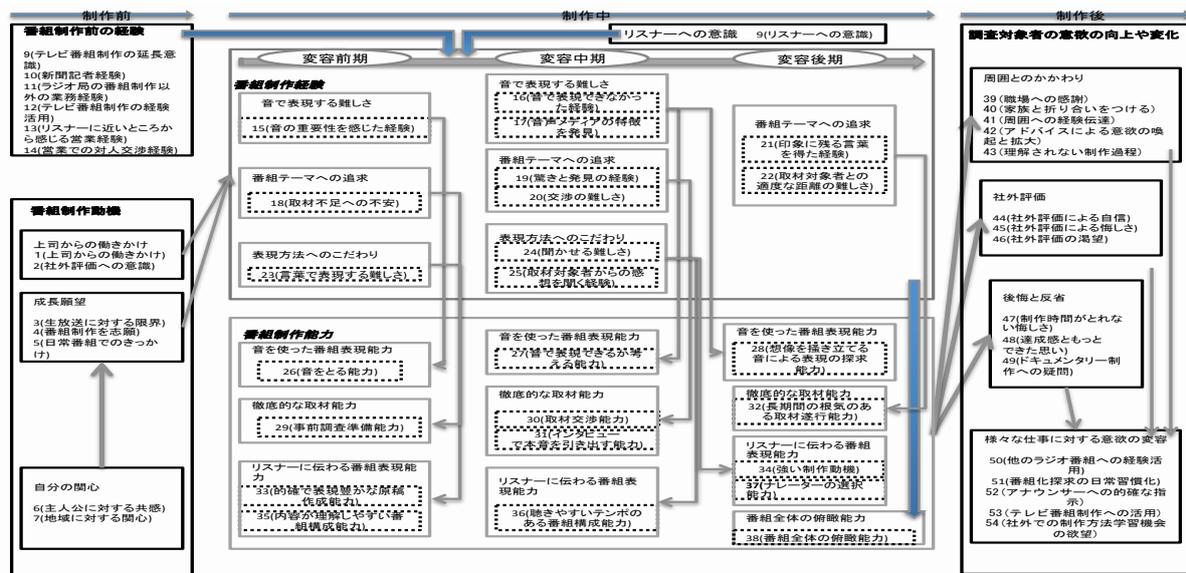


図1 ドキュメンタリー制作者の能力転用モデル(筆者作成)

4. 考察

4-1. RQ1の分析と結果

制作者はドキュメンタリー制作において、11の制作経験から13の制作能力を獲得していることが明らかとなった。なぜ発見できたのかといえば、制作者の心理状態について半構造化インタビューによってデータ化できたからである。

サブカテゴリーの音を使った表現能力では、ラジオ番組での音の重要性を感じた経験から「音を取る能力」を獲得する。音声メディアの特徴を発見し、音で表現できなかった経験から、「音で表現するか考える能力」「想像を掻き立てる音による表現を探究する能力」を獲得することができる。サブカテゴリーの徹底的な取材能力では、番組にするための取材への不安から「事前調査準備能力」を獲得する。番組取材の交渉の難しさから「取材交渉能力」を獲得する。一方で本音と事実と迫りたいと「インタビューによって本音を引き出す能力」を獲得する。印象に残る言葉を得ると「長期間の根気のある取材遂行能力」が必要だと確信する。最後にサブカテゴリーのリスナーに伝わる番組表現能力についてである。番組の場面を現場音以外で表現するのはナレーションである。その原稿制作を重ねることで「的確で表現力豊かな原稿作成能力」「内容が理解しやすい番

組構成能力」を獲得する。しかし、リスナーの誰もが差異なくしっかり理解できるようにするためには、何を伝えたいかという「強い制作動機」が必要である。番組の感想によって「聴きやすいテンポのある番組構成能力」を獲得する。また番組にあった聴きやすい声と語りをもつ「ナレーターの選択能力」も必要である。そして、最終的には制作者はこうした全ての制作経験から番組制作全体を見渡せる「番組全体の俯瞰能力」を獲得することが明らかとなった。

4-2 RQ2の分析と結果

RQ1で獲得した能力をドキュメンタリー以外の番組に転用できるかという問題意識については、生放送など他の番組や放送局内の他の業務への能力転用がみられた。さらに制作能力転用に関する意欲の変容が明らかとなった。サブカテゴリーにある様々な仕事に対する意欲の変容では、獲得した能力は、その後のドキュメンタリーや他の番組の制作に転用されている。そして番組で取り上げる内容や取材対象に対し、制作者の目線で日常的に探究しようとする意欲の変容がみられる。またテレビなど他のメディアでの業務にも活用している。さらに、自局内にとどまらず社外に学習機会を求めていることも明らかになった。

能力の転用の動機には、制作番組の出来に対する制作者自身の後悔と反省がある。他の動機としては社外評価が挙げられる。他者の感想や講評、審査結果によって自信や悔しさをもたらし、次に制作するドキュメンタリーで納得する社外評価を目指している。つまりリスナーではなく、番組の評価のために制作している。この2つの動機が制作者のドキュメンタリーへのこだわりを生み、その後のあくなき探究心を芽生えさせている。また獲得した能力については制作者自身が職場の他の制作者へ轉移したいという欲求をもたらす変容も明らかになった。ドキュメンタリーを制作した結果、周囲の同僚や部下に自分の経験を伝えようと、新たな関係が生まれる。ドキュメンタリー制作者が職場に増えれば、学習転移と職場学習が促進される可能性がある。

4-3 理論的含意

第1に、「内容が理解しやすい構成能力」「的確で表現力豊かな原稿作成能力」「聴きやすいテンポのある番組構成能力」「インタビューで本音を引き出す能力」「長期間の根気のある取材遂行能力」「ナレーターの選択能力」「番組全体の俯瞰能力」の7つのドキュメンタリー制作の能力が本研究によって明らかとなった。これらは「番組のテーマに深くこだわり、表現方法に執着する能力」として明らかになった点で意義があると考えられる。ドキュメンタリー制作者のモチベーションを支えているのは、事実を調査し表現し、それをリスナーへ伝えたいという執念やこだわりである。さらに生放送との能力の比較では、前述の7つの能力に加え「音をとる能力」「音で表現できるか考える能力」「想像を掻き立てる音による表現の探求能力」「制作動機の強さ」の4つのドキュメンタリーの制作能力も明らかになった。生放送は日常の編成においてラジオ局側から仕事を与えられているものであり、自主的な番組制作動機はほぼ不要である。これらの能力は先行研究に照らし合わせても、生放送だけでは獲得できない能力もあり、ドキュメンタリー制作で獲得できる能力を明らかにしたことの意義は大きい。

第2にドキュメンタリー制作者の社外評価への欲求が明らかになった。社会との関係や価値観が変化するという先行研究に対して、本研究で明らかにしたことは異なる。制作能力を獲得するには、制作者は番組を通してリスナーとのコミュニケーションが不可欠である。制作者が社外評価を欲しているのは、リスナーから日常はしっかりした番組の評価や感想を得られていないからである。つまり制作者とリスナーの感想や評価との間の不透明な壁の存在が明らかとなった。

制作者はドキュメンタリーのように長期間制作した番組には思い入れがある。制作者が欲しい感想とは制作した番組の制作意図がどの程度伝わったかどうかである。しかしリスナー全ての感想を得られる機会はなく、県域民間ラジオ局の聴取率調査は全くないか1年に数回で1週間程度である。そこで制作者が直接感想や評価を得られる貴重な機会の1つが社外評価である。

第3に自らの具体的な経験がなくても経験学習モデルが活用されていることが明らかとなった。従来の経験学習モデルは個体の具体的な経験から内省し概念化されたものを実践していることに特徴がある。しかし制作者の場合は、具体的な経験以外に、想像上のリスナーの感想をもとに内省し、概念化されたものを実践していることが明らかになった。感想を想像せざるを得ないのは、制作した番組に対して多くの感想が得られないからである。想像して得られる経験をもとにした経験学習モデルはメディア全体への育成にも寄与すると思われる。つまり具体的な経験を前提としたこれまでの経験学習モデルの枠組みから、想像上の経験にまで拡張して適用可能であることから、本研究が経験学習モデルの理論的發展に貢献していると考えられる。

4-4 ラジオドキュメンタリー制作経験者の越境的学習

RQ2によって副次的に分析された越境的学習について述べる。制作者の意欲の変容により、学習機会を欲し、自局外の制作者との間で越境的学習を行いたいという興味や意志が明らかとなった。制作者は取材対象者や共同制作者とのコミュニケーション能力が不可欠である。しかし1人で行うために相談相手でもあり共同制作者となりうるのは身近な上司や先輩であるが、アドバイスを求めても、そもそも職場では制作経験者が減少して満足な機会が得られず、局内での学習の限界を感じてい

る。しかし局外の制作者との接触機会を得ることで制作方法を学ぶことは可能である。したがって、放送団体の研修会や勉強会などの局外の越境的学習の場で学び、学んだことを局内に持ち帰って実践し、局内で共有していく可能性がある。

5. 研究の限界と課題

本研究は、ドキュメンタリーの制作者で、得た経験を生かそうと考えている人を分析焦点者にした。異なる調査対象者から別の能力を明らかにできる可能性がある。また積極的に経験を生かそうとしている者を対象にしているため、全ての制作者に適用できるものではない。また他の番組にどんな場面で何の能力を転用できるかも明らかにできていない。一方、主に転用される先の生放送の経験と能力との関連が明らかにできれば、転用される能力も指摘できる。また能力には個人的な経験も大きく影響し、能力への影響は明らかにできていない。さらに制作者が社外評価を活用する方法も明らかになっていない。越境的学習については、越境的学習と組織への往還が解明できれば、制作者を育成する点からも興味深い。

以上の点に関しては今後の研究の課題としたい。

引用文献

- 1) ビデオリサーチ社(2018):「2017年12月度調査結果」http://www.video.co.jp/solution/media-data/radiotatingdata_chtm
- 2) 後藤心平・佐藤和紀・齋藤玲・堀田龍也(2017):「高校生のラジオ番組制作体験によるメディア・リテラシー育成プログラムの開発と評価」『教育メディア研究』No.23(2), pp.107-117.
- 3) 牛山佳菜代(2013):「地域メディア・エコロジー論—地域情報生成過程の変容分析—」芙蓉書房出版
- 4) 樺島榮一郎(2015):「メディア・コンテンツ産業のコミュニケーション研究」ミネルヴァ書房
- 5) 社団法人日本民間放送連盟(2010):「平成22年日本民間放送連盟賞受賞一覧」
- 6) 社団法人日本民間放送連盟(2018):「日本民間放送年鑑」コーケン出版
- 7) 久本憲夫・川島広明(2008):「番組制作における多様な雇用形態:中堅ラジオ局の事例を中心に」『京都大学大学院経済学研究科 Working Paper』J-68.
- 8) 厚生労働省(2018):「働き方・休み方改善ポータルサイト」<https://work-holiday.mhlw.go.jp/case/>
- 9) 横山美和・田中克明・赤石美奈・堀 浩一(2006):「ラジオ番組制作におけるコンテンツ生成支援に関する一手法:制作者の内省的思考を促す創造支援システム」『映像情報メディア』No.59, pp.776-785.
- 10) 加藤裕治・船戸修一・武田俊輔・祐成保志(2016):「地域との関係のなかで形成される放送人のアイデンティティ: NHKのラジオ・ファーム・ディレクター(RFD)の聞き取り調査から」『東海社会学会年報』No.8, pp.82-92.
- 11) 坂本旬(2009):「メディア・リテラシー教育とドキュメンタリー制作」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』No.6, pp.121-138.
- 12) 柳産優二(2015):「映像ドキュメンタリー制作指導の研究:女子大での教育実践を考察」『椋山女学園大学研究論集 社会科学篇』No.46, pp.133-144.
- 13) 武田尚子(2012):「映像資料と社会調査方法:初期テレビ・ドキュメンタリー『日本の素顔』の取材対象と方法」『武蔵大学総合研究所紀要』22, pp.1-22.
- 14) 竹林紀雄(2013):「テレビ・ドキュメンタリーは何を“描く”のか」『文教大学大学院情報学研究科 ITNewsLetter』No.9, pp.3-4.
- 15) 中原淳(2012):『経営学習論:人材育成を科学する』東京大学出版会
- 16) 荒木淳子(2008):「職場を越境する社会人学習のための理論的基盤の検討」『経営行動科学』21(2), pp.119-128.
- 17) Kay Peterson, David A. Kolb. (2017=2018) *How You Learn Is How You Live: Using Nine Ways of Learning to Transform Your Life*. Berrett-Koehler Publishers.(中野真由美訳『最強の経験学習』辰巳出版)
- 18) Engeström, Y. (2008=2013). *From teams to joints: Activity-theoretical studies of collaboration and learning at work*, Cambridge University Press. (山住勝宏・山住勝利・蓮見二郎訳『ノットワーキング結び合う人間活動の創造へ』新曜社)
- 19) 新村出編(2018):『広辞苑』岩波書店
- 20) 石山恒貴(2018):『越境的学習のメカニズム-実践共同体を往還しキャリア構築するナレッジ・ブローカーの実像』福村出版
- 21) Lave, J., & Wenger, E. (1991=1993). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*, Cambridge university press.(佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書)
- 22) 木下康仁(2007):『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』, 弘文堂